月明かりの降る町

雪雲０１２１

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
月明かりの降る町

【Ｎコード】
Ｎ３４８７Ｗ

【作者名】
雪雲０１２１

【あらすじ】
銃刀法廃止。
××国に起きた大規模な暗殺計画・・・。
意味のない惨劇
変わらない現実

あなたは愛する者を守り切ることができますか？

第1話　憲法改正（前書き）

初投稿ですっ（＾＾♪

下手かもしれませんが・・・。

がんばります♪

第1話　憲法改正

「国の憲法であった、銃刀法が廃止されることになりました～～。」

アナウンサーの声が、この部屋の静寂を壊す。

「ふ～～ん。」

この部屋の主、冬夜杏子（とうやあんず）がソファベットで寝転がりながら、２０時のニュースを見ている。

今日は、ずっとこの話題でもちきりだった。

そりゃそうだよなぁ～今まで変えなかった法律を、廃止するのだから。

それにしても、どうして銃刀法を廃止するのだろうか？××国の治安が悪くなるのは当然なのに・・・？色々な事を考えていると、階下からミートソースのいい香りがしてきた。

「杏子、夕飯できたって。」

弟の冬夜麗（とうやれい）の声がした。

杏子は、夕飯にささやかな期待をしながら、階下へと階段を下りて行った。

ガチャ　ガチャガチャ

母の冬夜清江（とうやきよえ）が、スパゲティを運んでいた。

「あっ　杏子っ　てつだってっ」

テレビを見ながら自分のスパゲティを食べている麗と兄の冬夜夕（とうや）宇（ゆう）を見た。

うぅ・・・悔しい

「ただいまぁ～」

玄関から鼻をくんくんさせながら父、冬夜直一（とうやなおかず）が入ってきた

さくさくといすに座るともぞもぞ食事をはじめていた。

これは日常・・・。

きっと杏子がこの家を出るまでずっと続いていくだろう日常。

この日々を幸せか？と聞かれても、今は小首を傾げることしかできない。

そんな呑気なことを言えるのは、今日までともしらずに。

ガチャン・・・。

杏子が手に持っていたハイビスカスティの入ったコップを床に落とした。

コップは不吉な音を立てながらフローリングの床に中身をまき散らしながら割れた。

床に散ったハイビスカスティが、窓から差し込んでくる月明かりを受け、赤い鮮血のようにみえた。

ガラスの割れる音を聞いた母が、ぞうきんとチリトリを持ってきた。
杏子はそれを受け取ると、きびきび掃除をすませ部屋に戻り、窓から景色を眺めることにした。
今日もいつもと何も変わらずに、地平線まで続いているのかと思うぐらい連なっている民家、車の良く通る道路、そして、今晩も見守るかのように地上をてらす月明かり。

杏子は願う。

この馬鹿みたいに普通の日常が永遠に続くことを。

杏子は願う。

この町が惨劇に巻き込まれないことを。

もう手にしないと2年前に誓ったはずの蝶の模様のナイフを握る。

強く　強く握る。

第1話　憲法改正（後書き）

読んでくださってありがとうございました（＾＾♪

大感謝ですっ♪

「月明かりの降る町」は連載しますので、これからもよろしくお願いしますっ♪

第2話　壊されたもの（前書き）

2話目です（＾＾♪
読んでくださるとさいわいです♪

第2話　壊されたもの

少女が一人立っている。

何時になったら帰るのだろうか？

少女の瞳は、何も映さず漆黒の夜空を眺めていた。

曇天の空から、ポツリ・・・ポツリ・・・降り出した雨が、少女をずぶぬれにしてゆく。

その時、稲妻が轟き、少女の顔が少しだけ見えた。

その顔に張り付いていたものは、邪悪な笑み。

☆「不謹慎なニュースばかりだな・・・。」

直一が、テレビを見ながらつぶやいた。

「そうね・・・。」

清江もつぶやく。

今日のニュースは、案の定、行方不明者と死者を伝えるものだった。

「今日、法律事務所に電話してみるか・・・。」

そういうと、直一は会社に出かけて行った。
この日も、時は流れる。
いつもどうり、普段どうり、
学校が終わり、帰路についた杏子は、曇りの空にぼんやりとした太陽をみつけた。
そういえば、今日は午後7時ぐらいから雨降るんだっけ。
ガチャリ
玄関の鍵を開ける。
この家に帰るのが1番早いのは、いつもあたしだ。
小学生の頃は、寂しいとか思ったこともあったのかもしれない、けれど今では特にさみしいと感じることもなくなっていた。
「ただいまぁ～」
誰もいないリビングに小声でいう。
当然、返事はかえってこない。
ふらりとソファに座ると、ウサギのパペットがこんにちはしていた。
パペットを怪訝そうに眺めると、1枚の手紙がはらりと床に舞い降りる。
？
［ＨＡＰＰＹ　ＢＩＲＴＨＤＡＹ　ＦＯＲ　ＫＩＹＯＥ］
母さんあてか。
パペットをあったように置くとソファでそのままねてしまった。

夜の１２時みんなの騒がしさで目が覚めた。
「麗・・・どうしたの？」
玄関に行こうとしていた麗を引き留めた。
「えっ　寝ぼけてんの。」
はい・・・今起きましたから。
「なんでこんなに騒がしいの？」
麗は、少し杏子をねめつけると、小声で嫌そうに言った。
「父さんが・・・帰ってこないんだよ・・・。」

ピリリリリ　ピリリリ

突然の電話に背筋がぞくっとする。

「はい・・・。」

清江がでる。

「今から、お伺いしてもよろしいですよね？」

ん？
おかしくないか？
そこは普通
「今から、お伺いしてもよろしいでしょうか？」
って　いうべきなのでは・・・？

麗と夕宇も不審がりだす。
その時。

ピンポ～ン

チャイムが鳴る。
「お届けものです。」

白い大きな箱。
杏子の脳裏に不吉の、２文字が浮かぶ。

夕宇がガムテープを外す。

蓋と蓋の隙間から見えた青白いもの。

夕宇が顔を歪め膠着する。

清江の角度からだと中身がみえてないらしい。
不思議そうに蓋をあけ・・・。

ぎゃぁぁぁぁああ

ああ

清江は家を飛び出したっきり帰ってこなかった。

「なんで・・・親父が・・・殺されるんだよ？」
夕宇が、壁をバンバン叩く。
夕宇の右手に鮮血が滲みだす。

「くっ?ぅわぁああ。」
夕宇は、止める暇なくさっきかかってきた番号に電話する。

その内容はすべて挑発するものだった。
麗と杏子は、止められなかったことを後悔する。

☆
杏子は奇麗に星が見える丘に立っていた。
一筋の涙が頬に線を作る。
しかし、その線を降り出したばかりの雨が消した。
雨は徐々に強まり杏子をずぶぬれにしてゆく。

「おい」
突然後ろから声をかけられる。
ふだんからあまり人気のない場所なのに？
杏子は警戒してポケットのナイフを握る。

振り返る。

そこにいたのは、杏子と瓜二つの顔の少女だった。
「誰？」
杏子が冷たく言い放つ。
「我がなにもなのかは、何れわかるだろう。
ところでお前は、冬夜杏子か？」
その少女はに見た目に似合わぬ老いた音色で話す。
「なんで？あたしの名前を・・・？」
すると、少女は、うれしそうにハニカンだ。

「ようやく見つけぞ
冬　夜　杏　子っ」
杏子は警戒心をたかめた。
「誰？」
二人の間に夜風がふく。

「あぁ　言いそびれた。
一言で言うと、魔女・・・。」
杏子が目を細める。
「で。」
「我にお前の未来を渡すなら、魔力を授けよう。」

少女は、真剣な眼差しで杏子に語りかける。
「はぁ？　何言ってんの？・・・。」
杏子は真剣なまなざしに気圧されそうになる。
魔女は徐々に近ずいてくる、それに比例して杏子は後ずさる。
「このままだと　落ちるが。」
意を決して飛び降りようとしたその時。
爪の長い、冷え切ったてが杏子の肩を握る。
杏子は肩を震わせた。
「本気で言ってんの？」

「えぇ・・・。」

杏子は魔女に向きなおり言った。
「分かった。
　要求に応じるわ。」

その言葉を聞いた途端にうれしそうに顔を歪めた。

「くっはははははははははははははははははははははは
はははははははははははははははははははははは・・・・・・
・・・・・・・・。

そして・・・。

魔女は銀の銃弾になると、杏子の心臓を突き刺した。
不思議と血はでない。

ずぶ濡れだったはずの服は、下したてのように美しかった。

第2話　壊されたもの（後書き）

読んでくださってありがとうございます（＾＾♪

第3話　儚げな瞳（前書き）

失われし少女の追憶・・・。
交差する彼らのおもいの宛ては・・・？

第3話　儚げな瞳

「忘れないでほしい・・・・。」

少女は儚げに笑った。

僕は何が真実で何が虚実かわからなくなっていた。
でも、ただひとつ言えることがある。
それは・・・・。

この女が敵だということ。

パン・・・・。

僕は拳銃を発砲する。

しかし、飛んで行った銃弾は、少女によって華麗に弾かれた。

「・・・あたしが常に味方だってことを・・・。」

少女は最後にそう付け足すと、すぅーと夜の暗がりに溶け込んだ。

☆

麗と杏子・夕宇は、父親の実家に来ている。

「・・・都会はたいへんねぇ～。」

父の母である澤森和波（さわもりかずは）が呟いた。

杏子は縁側の樽の中に入っている金魚で遊んでいた。

朝日が水面で跳ね返って眩しい。

その時、私が独り言を言いながらくすくす笑い出す。

僕は、最近始まったその動作を不審に思い首をかしげた。

「よしっ　麗、海釣り行こうぜっ。」
夕宇が二カッと笑った。
「えぇ～歩いたら１５分はかかるよぉ？」
「バスがある。」
この暑い中、外出したくない僕は、一生懸命言い訳を考える。
「おぉ～い　杏子っ　お前行くかぁ？」
杏子は首を横にブンブンふった。
「んじゃ　麗は強制参加だな。」
その一言にいやそうな顔をして抵抗する。
「えぇ～やだよぉ　行かないよぉ　あっ夏休みの宿題しなきゃ・・・。」
もう何を言っても聞いてくれない・・・。
ふと、杏子に目をやるとにこやかに手を振っていた。

☆

「潮風がきもちいぜっ」
夕宇が両腕を広げながら叫ぶ。
「熱い」
「なっ　麗・・・。」
「なに。」
「竿・・・忘れた・・・。」
2人の間にシラケ鳥が通っていく・・・。
「おいいいいいいいいいいいい・・・・・。」
麗の叫び声が響き渡った。

☆

夜、私はおばちゃんとの相部屋だった。

「杏子たちは、明日・・・本当に帰るのかい？」
「・・・うん。」
「都会は　危ないぞ？」
杏子は静かにははっと笑った。
「いいんだよ。
別に・・・。
危なくたって・・・問題は、危険か安全かじゃないの、その場所に行く自分が強いか弱いか・・・。
それだけ。」
そういうと、おばちゃんがニコっと笑った。
「ばっちゃんより先にくたばられたらいやだねぇ・・・。」
ほろり。
おばちゃんの目から何かが垂れた。
しかし私はその何かの正体を知ることなく浅い眠りについた。
翌朝、冬夜さんたちは誰がここに残るのか話し合いをしていた。
「僕は、学校があるから帰りたいかな～。」
そういいながら、夏休み後半なのにとてもきれいな宿題のワークを剛速球の如くやっていた。
「俺は・・・まだ大学決まってないから・・・ここら辺の学校に行ってもいいんだけどな。」
「だけど・・・何？」
私が付け足す。
夕宇は、畳の上で転がりながら・・・。
「俺・・・フ×屋でバイトしたいんだよな・・・。」
僕と私は苦笑いを浮かべ膠着した。
フ×屋って・・・ケーキ屋さんだよな・・・お前男だよな・・・。
当の夕宇は、能天気にあはははと笑いつずけてた。
その後、私だけが、東京に戻ることになった。
なんでそうなったのかは分らないが、一番有力なのは、夕宇が一人だと寂しいということらしい。

「じゃね・・・。」
私は軽くはにかみ、左手を2回振った、カバンで塞がれた右手がほんのり赤らんでいて荷物が重いことを伝えていた。
「まぁ～たな～」
夕宇が、大声で汽車に乗った杏子に言う。
その声は、杏に届いたのか否かはわからない。
私をのせた汽車はゆっくりと速度を上げやがて見えなくなった。
私はあいていた席にふっと座った、今までの疲れでうとうとと眠くなる・・・
こんにちは・・・
遠のきかけた意識のなかでか細い声がした。
うっすらと眼をひらく。
「おーいっこんにちは。」
「ふっわぁ」
目の前で顔を覗き込んでいた少年と目が合い変な声をあげてしまう。
「あはは寝起きの奇襲・・・ですか・・・。」
ほんとだよ・・・びっくりした・・・冗談じゃないよ・・・。
「あの・・・誰です？」
私の脳内友人ペーパーにこの人はいないのだが・・・。
「あっ失礼、紹介が遅れました。
僕は、日下和弥（くさかかずや）この二人は助手。」
・・・っん？
なんで、みんなして無愛想なんだ？
そして日下が一言。
「やれ。」
降りかかって来るものをはじこうとナイフを振り回す。
しかし、帰ってきたものは、杏子の望んだ金属音ではなく頭部の激痛だった。

第3話　儚げな瞳（後書き）

読んでくださってありがとうございます（＾＾♪

第４話　永久の束縛と屈辱（前書き）

こぼれる涙　滴る鮮血　朦朧とする意識の果てに、少女が見た本当の現実。

第４話　永久の束縛と屈辱

暗い部屋、冷たいタイルのような床、生暖かいドロッとしたものが服についていた。　　「う・・・」
意識が戻っていくのがわかる。
「・・・。」
ゆっくりと体を起こすことを試みた。
「ぐぁあぁあ」
そのとたん鈍い痛みが後頭部を支配する。
も一度、立とうとする、少しは痛みが和らいだようだ、しかし、
ガジャリ
「・・・。」
その時、左手に銀の輪が、付いていることが分かった。
杏子の脳裏に２文字が浮かぶ。
『拘束』
不意に自虐的な笑みが
普段ナイフをしまっている
懐に手を当てる。
「・・・ない？」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3487w/

月明かりの降る町

2011年12月14日12時45分発行